

二十四孝について

1、はじめに—二十四孝とは

ただいまご紹介頂きました金でございます。本日は徳島大学国語学会の十周年という記念すべき日にお招きいただき大変光栄に存じます。ただ私は国文学についてはまったくの門外漢ですので、この記念すべき日にふさわしい話ができるかどうか、心もとないのですが、私の専門とする中国文学の中から国文学とも関係があり、皆様にも興味をもっていただけるような話題はないか、という事で、二十四孝のお話をしてみたいと思います。

二十四孝といっても若い方はもうご存じないかもしれませんが。これは中国の昔の親孝行な人の話を二十四集めたもので、中国ではもちろん、中国文化の影響をうけた朝鮮や日本でも、むかしは大変よく知られていたものです。特に親孝行の手本の話ですから、子供の教育にはこれがよく用いられ、日本でも江戸時代の寺小屋などでさかんに使われたようです。

中国文化圏では伝統的に儒教が重んぜられてきましたが、儒教

金 文 京

の実践道徳の中でもっとも重要なのは孝です。孝の道徳を分かりやすく一般の人にも教えるために、古くから孝子の話を集めた「孝子伝」というものが多く作られました。その中でもっとも普及した代表的なものが、すなわち二十四孝です。

こう申し上げると、なにか教訓的で堅苦しいものを想像されるかもしれませんが、実際の話には、あとでいくつか例をあげますように、ずいぶん現実ばなれした、まるでおとぎばなしのようなものもあり、また子供のためのものですから、大部分は絵がついていて、子供の本などというものが無い時代には、今の子供が絵本を見るような感覚でこれを読んだようであります。現に近代中国の代表的な文学者、魯迅は、「朝花夕拾」という随筆集の中の「二十四孝図」という文章で、子供の頃、最初に手に入れた絵本はかならず「二十四孝図」であったと書いています。日本では奈良絵本などにずいぶん精巧な二十四孝図があります。

このように二十四孝は、多くの人が子供の頃から見聞きしていた、いわばだれもが知っている基礎的教養のようになっていたた

め、たんなる道德的教訓としてではなく、時に文学作品の素材になることもありました。中国ではしばしば芝居にも仕組まれております。これは教養と娯楽、道德教育を兼ねたものでしょう。日本でも落語に二十四孝があります。歌舞伎、人形浄瑠璃の「本朝二十四孝」や西鶴の「本朝二十不孝」が、これをもじったものであることは、いうまでもありません。

立川談志という落語家はみなさんご存じと思いますが、明治の十年代、今の談志の数代前の談志が、東京の寄席で話のあと「郭巨の釜掘り」という踊をやつて、ずいぶん評判になったということです。これを実際に見た馬場孤蝶の『明治の東京』によると、それは、郭巨が子を埋める所作を踊にしたもので、座布団を巻いて赤子にして、それを抱いてなんとか言つてはバア、またなんとか言つてはバア、子供との別れを悲しむ身振りをして、それから歟で地面を掘る真似をし、最後に釜が出て来たというので、大喜びして、「婦命頂礼テケレツのバア」といって、ステテコ踊をやつたそうで、なんとも珍妙な踊であつたようです。この頃の寄席では、ステテコ踊やヘラヘラ踊などが流行っていましたから、談志のこの踊もその一種でしょう。

こう申しあげても、ご存じないかたには、なんのことやらお分りにならないし、また可笑しくもないでしょうが、この郭巨の話というのが、実は二十四孝のひとつなのです。

郭巨は後漢の時代の人でしたが、貧しくて母を養うことができない、しかも三歳になる子供がいて、母親がいつもその孫に自分の食べ物をやってしまうので、郭巨は妻と相談して、子供を殺すこととし、埋めるために穴を掘つた、すると穴から黄金一釜が出

て、その上に、「天が孝子郭巨に賜う」と書いてあつたという話です。日本ではすでに『今昔物語集』にこの話が見えていますから、相当古くから知られていたようです。談志が踊つたのは、子を埋める場面です。ずいぶんと現実ばなれた、かつ考えようによつては残酷な話ですが、それを面白可笑しく茶化したところを受けたのでしょうか。それにしても談志のこの芸が受けたところとは、寄席に来る人々がみな二十四孝の話をよく知っていたということです。なお談志の郭巨踊は、もとは博多仁輪加であつたという説もあります。

郭巨に関連した話をもうひとつだけいたします。みなさんこれまたよくご存じの水戸黄門こと水戸家三代目の徳川光圀が、諸國を漫遊したというのは作り話ですが、水戸の領内を視察してまわつたのは事実です。その視察中のエピソードのひとつに、光圀が孝子の弥作を顕彰したという話があります。母親に孝養を尽くす弥作に光圀が黄金十兩を褒美としてあたえるのですが、その時光圀は、「これは我あたふるにあらず、天の賜うところなり」と言つたと、光圀の伝記である『桃源遺事』という本に書いてあります。この光圀のせりふが事実なのか、それとも『桃源遺事』の作者の潤色なのか、はつきりしませんが、その「天の賜うところ」というのは、おそらく郭巨の話で「天が賜う」とあるのからヒントを得たものでしょう。この光圀と弥作の話は、明治になって『幼学綱要』という本に収められました。『幼学綱要』は明治天皇じきじきのお声がかかりで、侍従の儒者、元田永孚が編纂したもので、修身の教科書として広く用いられたものです。そしてそこにも二十四孝の話がいくつか採られています。江戸時代だけではなく、

明治から昭和の戦前まで、二十四孝の話がいかによく知られていたか、これだけでもお分かりいただけたと思います。

ところで郭巨の話で、穴から黄金の釜が出てきたというところですが、中国のものと話では「黄金一釜」となっています。実はこの釜は量の単位のこと、メートル法では約十二リットルに相当します。つまりカマではないのです。したがって談志の釜掘りの踊というの、厳密に言えば間違ひなのです。単位の釜を器のカマと誤解したのは、ふつう日本においてであると考えられており、『今昔物語集』ではすでに黄金の釜となっています。ところが朝鮮では釜の中に黄金が入っていたことになっており、敦煌から出た「孝子伝」も同様で、単位の釜を器の釜と解する説が朝鮮そして中国の民間にあつたことが分ります。日本の伝承はそれがさらに発展したものでしょう。

このように二十四孝の話は、本場の中国でも異伝があり、また朝鮮、日本へと伝わる過程で、話が微妙に変わったり、中国にはない特色が付け加わることもあつたのです。二十四孝の中でいちばんよく知られているのは、おそらく孟宗竹で有名な孟宗の話でしょうが、日本では孟宗が笥を掘る場面、なぜか笥が三本描かれるという特徴があるのも、その一例でしょう。これについては母利司郎氏に「竹の子三本雪の中」（国文学研究資料館紀要「十二号」という興味深い論文があります。しかも二十四人のメンバーは固定していたわけではなく、歴史的に変遷があり、複雑な様相を呈しています。次にそのことをお話いたします。

2、二十四孝の系統

現在二十四孝と一般によばれているものは、十四世紀の元の時代に郭居敬という人が選んだ「二十四孝詩選」にもとづいています。これは日本でも中国でもそうです。ところが、日本と朝鮮には、この現行本の二十四孝とは別系統のものが古くから伝わっています。『孝行録』という本に収められた二十四孝がそれです。

『孝行録』は、朝鮮の高麗時代にできた本で、李齊賢という当時の文人の賛がついています。この李齊賢の郭巨についての賛に、「黄金は釜に満つ」とあつて、釜が日本と同じく器と解釈されていたことが分かります。

この『孝行録』の二十四孝と現行の郭居敬の二十四孝をくらべると、メンバーに出入りがあり、八人、つまり三分の一が一致しません。しかも『孝行録』の方にしか見えない話には、ずいぶん奇妙なものがあります。ここでは三つの話を紹介しましょう。

まず第一は、元覚の話です。元覚には父と祖父がいましたが、祖父は年をとり病気がちなので、父は祖父を山中に捨ててにします。元覚は反対でしたが、やむなく父とともに山にゆき、祖父を置き去りにします。帰るときに祖父を運んだモッコを持ってゆこうとすると、父はなんのためにそんなものをもって帰るのだと言いますが、元覚が今度はこれでお父さんを運ぶんだと答えたので、父も自分の非をさと、祖父を連れかえったという話です。これは中国にも姥捨ての習慣があつたらしいことを暗示するめずらしい話です。

次は劉明達の話。劉明達は飢饉に遭い、妻子と母を連れて食糧

のある別の地方に避難しますが、道中子供がいるので母に十分な食べ物をあげられないと、子供を売ってしまいます。すると妻は子との別れを悲しんで、自分の乳房を切って子にあたえたというのです。これは大変グロテスクで、かつ少なくとも現代人には理解しがたい話です。

最後は王武子の妻の話。これは王武子の妻が病気の姑のために、股の肉を割いて食べさせるという話です。中国では人間の肉は薬であると考えられていたので、よく孝子が親のために股の肉を割いて食べさせるという話がありますが、これは子の方の命にもかかりますので、禁令がたびたび出されています。

以上三つの話は、郭居敬の二十四孝にはありません。

従来の研究では、『孝行録』は高麗で出た本でもあり、奇妙な話も多いので、中国ではなく高麗で編纂されたものだろうと考えられていました。しかしそれはどうやらそうではないようです。

その第一の証拠は、今ご紹介した三つの話のように、現行本の二十四孝になく、『孝行録』にのみある話が、実は古い時代には中国でもよく知られていたことです。たとえば劉明達の話は、十三、四世紀の元の時代の戯曲、ふつう元曲とよびますが、その中の「看銭奴」（守銭奴の意味です）という題の芝居に、「我は母親に仕えて子を売った明達にあらず、また老母を敬って子を埋めた郭巨にもあらず」と、郭巨とともに出てきます。ということは当時、この話は郭巨とおなじようによく知られていたということでしょう。またおなじく元の芝居で「西廂記」という作品、これは現在の京劇でもよく上演されますが、その作者である王実甫という人には、

「明達売子」という作品があつたことが分かつています。ただこの作品は現在伝わっておりません。あんな奇妙な話をいっただいのように芝居にしたのか、見られないのが残念です。

もっと古い時代では、井上靖の小説でおなじみの敦煌の石窟から発見された唐、五代の文書の中に「孝子伝」がありますが、そこに劉明達と王武子の妻の話が、また同じく敦煌から出た「搜神記」に、元覚の話がそれぞれ収められています。

さらに元覚の話は、宋代の『太平広記』（巻五一九）に引かれた「孝子伝」では原穀、また日本に古くから伝わる「孝子伝」、これには陽明文庫本と京大（清家）本がありますが、そこでは原谷となっています。日本の『今昔物語集』にもやはり原谷とみえます。この原谷という表記がどうやら一番古いようで、漢代のお墓の中の画像石では、やはり原谷です。つまりこの姥捨ての話は、原谷、原穀、元覚と名を変えながら、漢代から元代までずっと伝えられてきたのですが、その後は中国本土では伝来を絶ち、朝鮮と日本に残ったというわけです。

次に、『孝行録』系統の二十四孝が元来は中国のものであったより直接的な証拠は、これとまったく同じメンバーの孝子図が、宋金元代のお墓の中の画像石や壁画から出てきたことです。最近の中国での考古学的発見には目覚ましいものがありますが、古代の発掘品が注目を集めやすいのに対して、近世のものは数が多いせいかあまり注意を惹きません。しかし中には古代のものにおとらず重要な発見があります。この孝子図の壁画などもそのひとつでしょう。

近年の発掘報告によると、中国北部の主に山西省、河南省のあ

たりの宋金元の墓から、かなりの数の孝子図が見つかっております。それらは必ずしも二十四人そろっているとはかぎらないのですが、二十四人のものは、みな現行本ではなく、『孝行録』系統の二十四孝に一致します。たとえば古い例では、洛陽から発見された北宋の崇寧五年（一一〇六）の石棺線刻図がそうです（「洛陽北宋張君墓画像石棺」『文物』一九八四年七期）。また二十四人そろっていないものでも、たいていは劉明達などさきほど挙げた『孝行録』にしか見えない人物が入っているのです。『孝行録』系統のものであることが分かります。詳しくは後に掲げた論文をご参照ください。

つまり宋代から元代にかけて、すくなくとも中国の北方では、『孝行録』系統の二十四孝が一般的であったわけです。さきほど申し上げた元曲は、やはり主に北方で流行したお芝居ですから、そこに『孝行録』にしか見えない劉明達の話が出てくるのは当然でしょう。『孝行録』に賛をつけた高麗の李齊賢は、当時の中国の元朝に行ったことがあるので、そこで流行の二十四孝を仕入れてきたのでしょう。それが日本にも伝わり、室町時代頃の写本がいくつも残されています。

ところが本場の中国では、次の明代以降、この系統の二十四孝は亡んでしまい、分からなくなってしまうのです。おそらく劉明達のような奇妙な話が、時代の風潮に合わなくなったからでしょう。その代りに郭居敬の二十四孝、それからさきほどは申しあげませんでした、もうひとつ「日記故事」という一種の日用類書に載っている二十四孝が流行するようになり、今日に至っています。

郭居敬は福建省、つまり南方の出身であり、また「日記故事」も南方で出版されたものですから、『孝行録』系統がこれらに取って代わられたのは、南方の文化が北方の文化を圧倒したとも言ってもよいかもしれません。中国の古い文献が中国ではなく、日本や朝鮮に残っているケースは少なくありませんが、この『孝行録』もその一例であります。

ところで日本には、『孝行録』系統、郭居敬系統の二十四孝がどちらも入っていますが、当初これらをもたらししたのは、どうやら禅宗の僧侶であったようです。鎌倉から室町にかけて、五山に代表される禅僧が多く中国に留学したことはよく知られています。それらの留学僧が二十四孝の本や絵をもって帰ったのです。

たとえば室町時代の臨済僧で通想という人がいますが、その漢詩を集めた「猿吟集」（『群書類従』巻三八）には、「明達売子」という詩があり、その最後の句は、「涙を掩いて躊躇し乳を割くの時」となっています。お坊さんの詩としては、よほど変なものです。

いったいなぜ仏教の僧侶が儒教倫理である孝に関心をもったのでしょうか。ひとつには二十四孝が当時、絵の題材としてしきりに描かれたことが関係していると思われます。絵画は禅僧の重要な教養のひとつでした。日本に残されている古い二十四孝の写本には、たいていそのあとに瀟湘八景詩というのがついています。瀟湘八景というのは、日本の近江八景や金沢八景のもとになった山水画の代表的な題材です。それが二十四孝といっしょになっているということは、二十四孝もまた画題であったということでしょう。現に二十四孝にはたいてい絵がついています。

しかしそうは言っても、山水画と孝子図ではよほど趣がちがいます。なにかほかに二十四孝と禪宗を結びつける要素がありそうです。そのことを考える手がかりとなるのは、中国で孝子図が坟墓に描かれていたことでしょう。次に二十四孝の宗教的側面についてお話ししたいと思います。

3、二十四孝と宗教、説話

孝というのはふつう儒教の実践倫理であって、宗教思想とは考えられていないでしょうが、実はそうではないのです。孝はたんに子供は親に孝行しなければいけないというだけではなく、そのことによって親から子へと生命がつながり、親は子の供養により死後のやすらぎと永遠の命を得るという多分に宗教的要素もついています。したがって孝行は親が生きている時だけでなく、親が死んだ後にも大切なのです。お墓の中に孝子図がえがかれるのは、そのためにはかなりません。孝行したい時に親はいず、と言いますが、そうではなく親がいなくなつてからの孝行も重要でした。

孝を説いた儒教の最高の經典は「孝経」ですが、六朝時代にはこの「孝経」は仏教の「観音経」などと同じように宗教的な目的で唱えられ、それで病気がなおったり、敵が退散したというような話が伝えられています。このように「孝経」が神秘化されたのも、やはり孝が宗教的概念であつたからでしょう。

仏教が孝を重視したのは、僧侶は出家して親を顧みない親不孝者だという儒教側からの非難をかわすための方便だったと言われますが、むしろそういう面もあるにせよ、やはり孝自体に宗教性があつたからでしょう。仏教には目連救母をはじめとする孝子説

話がかなりあり、孝子説話、二十四孝の形成にも仏教は深くからんでいます。二十四孝の中に睽子の話がありますが、これは仏教起源です。

禪僧が二十四孝に興味をもつたのは、そのような孝の宗教的要素と関係があるでしょう。現在でも中国では、二十四孝の芝居はおもに葬式で演じられています。日本では葬式はもっぱら仏教の担当ですから、そういう意味でもつながりはあるでしょう。

もうひとつ二十四孝の宗教性に関連して興味深いのは、これらの話が親孝行を説きながら、その実、母親だけをその対象としていた。中には丁蘭の話のように、元来は父親、あるいは両親にたいするものであつたのが、のちに母親だけになってしまったものもあります。目連の話もやはり母親を地獄からたすけるというものです。

このように母と子の関係が特に強調されるのも、やはり宗教性と関係があると思われます。キリスト教のマリア信仰に典型的にあらわれているように、聖なる母と子の結合はきわめて宗教的な観念です。仏教では観音菩薩がそれに相当しますが、ただ母子結合はみられません。

さきほどの劉明達の妻を描いた宋元時代のお墓の壁画をみると、胸乳を露にした妻が手で乳を指しながら、子供との別れを悲しんでいるさまがリアルに描かれており、どことなく乳をはだけて幼いキリストを抱いたヨーロッパの聖母子像を連想させます。余談になりますが、ヨーロッパの絵画では、聖母像をはじめ女性の乳房を描いた絵が少なくないのに対して、東洋ではそのような

絵はほとんどありません。ところが孝子図にはこれがあります。

劉明達のはかにも唐夫人の話というのがあって、これは年老いて歯のない姑に、嫁が乳を飲ませる話で、その場面がやはりリアルに描かれています。この種の絵は、主題はもちろん孝行という道徳ですが、見ているとどうしてもエロチックな感じがします。おそらくそういう風に鑑賞した人もいたのではないかと、これは私の想像です。ともかく中国の絵画としてはきわめて特異なものであることはまちがいありません。

この母子結合についてもうひとつ面白いのは、禪僧の作った詩の中に、しばしば「母を憶う」というような題をみかけることです。たとえば日本の五山でよく読まれた『江湖風月集』という宋代の禪僧の詩をあつめた本がありますが、その中にはこの種の詩が少なくありません。そして父を憶う、というような詩は全然ないのです。ここにも二十四孝と禪僧とを結ぶ思想的背景があるように思えます。

母親にたいする孝行ということで、もうひとつ申し上げなければならぬのは、継母と子の話です。その代表は王祥の話でしょう。王祥は冬に鯉が食べたいという継母のわがままのため、氷の上で裸で横たわると、天がその孝心を嘉みして、氷の中から鯉が二匹躍り出たという話で、いわゆる継子いじめの系列に属するものと言つてよいでしょう。継母に関する話は、二十四孝の中ではかに舜と閔子がありますが、どちらもやはり継子いじめです。また冬に筍を取りに行く孟宗の話は、継母ではありませんが、王祥の話と同工異曲です。

継子いじめの話は、グリム童話など世界中の昔話に多く見られ

ますが、中国にはあまりそういう話がなく、これらの孝子説話がそれに相当するのではないかと思えます。グリム童話ではいじめられた継子が継母に仕返しをするというような話もありますが、これらの中国の孝子説話もあるいは元来はそういう話であつたのが、道徳的見地から変えられたのかもしれない。二十四孝の孝子説話が元来はグリム童話のような説話であつたとかんがえると、なぜ郭巨のような非現実な話や劉明達のような残酷な話があるのかということも分かりやすいように思えます。グリム童話にも残酷な話が多いことはご存じのとおりです。

母親と子供の関係について、最後に申し上げたい点は、これらの話の中に、母と子の性的な面が暗示されているのではないかということです。敦煌から発見された「舜子変」という作品では、舜が継母に虐待される場面で、継母と子の性的な関係がほのめかされています。

王祥や孟宗の話で、母のためにとりに行くのは、鯉や筍ですが、これらは子供を暗示しており、性的なシンボルであるとかんがえられます。中国の年画で、子供が鯉に抱き着いている絵をしばしばみかけますが、あれは年々有余の余が魚と同音だからという説明はあとからつけられたもので、元来は魚と子供は同じものであつたはずで

す。道徳的教訓である二十四孝について、こういう反道徳的なことをいうのは穏当ではありませんが、これらの話が元来はグリム童話とおなじような説話であつたとすると、そこに人間の普遍的な深層心理が反映しているのも当然でしょう。二十四孝の話がこれだけ広く流布し、文学の素材ともなつたのは、そのようなところ

にも理由があるのではないかと思います。

4、おわりに

いまだき二十四孝などというと、封建道徳をふりまわす時代錯誤と思われるが、しかしこの話の背景には、意外に複雑な要素があり、単純に過去の遺物とは決め付けられない面があります。私の話はそのほんの一部分のみです。日本にはまだ私などの知らない関係資料がたくさんあるようですから、国文学の方々にそういう資料をどんどん紹介していただき、中国や朝鮮の資料と比較すれば、また新しい事実が明らかになることと存じます。まとまりのない話でしたが、これで私の話を終えたいと思います。ありがとうございました。

参考文献

- ・徳田進『孝子説話集の研究』昭和三八年（井上書房）
- ・金文京『孝行録の明達売子について』『汲古』十五号（汲古書院）
- ・金文京『孝行録と二十四孝再論』『藝文研究』六五号（慶応義塾大学文学部）
- ・橋本草子『全相二十四孝選と郭居敬』『人文論叢』四三号（京都女子大学）